

こども園経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点(短期経営目標)
こども園教育目標 「元気な体と豊かな心、生きる力を持ったたくましい子ども」 《元気 勇気 笑顔 つながれ仲間》 ～やってみたい！やってみよう！一人一人が輝くために～ 1. 園児自らが興味関心をもって環境に関わり、心豊かでたくましく、生きる力を育てる。 2. 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、人権を大切に作る心を育てる。 3. 相手の思いを受け止めながら、自分の思いや考えを表現する力を育てる。		○一つ一つの活動に頑張る個々の姿をしっかりと受け止め認めることで園児は自信を付け、自己発揮しながら活動を進める姿が多く見られるようになった。 ○定期的なドキュメンテーションの配信により各学年の保育内容について理解を深めることができた。また、アプリでの配信により保護者の既読が確認できるようになり、お願いやお知らせ等が周知しやすくなった。 ○裏山での遊びの環境を意図的に多く取り入れたことで、体を動かしたり、自然を通して感じたり考えたりする体験を積むことができた。 △伸び伸びと園生活を送る園児は増えつつあるが、友達のよさに気づき園児同士が認め合えるつながりは、十分にもてなかった。 △積極的に栽培活動を取り組んだり、飼育物を通して愛情や生命の尊さについて意識したりしてきたが、行動や態度に結び付けることは難しかった。	・自ら遊ぼう、活動しようとする意欲、態度を大切にしながら自己発揮できる環境や関わりを工夫し、様々な人や物と関わったり触れ合ったりしながら、豊かな心を育てる。 ・一人一人の内面理解に努め、良さを認め、発達の特性に合った指導と支援に努め共に育ち合う集団をつくる。 ・身近な自然を意図的、計画的に遊びの中に取り入れ、主体的で協同的な活動ができる環境を工夫し、健康な心や体、豊かな感性を育てる。 ・生き生きと遊ぶ、言葉で伝え合う、互いに思いやり共同する力を育成するための教育活動、異年齢活動、体験活動の充実を図る。 ・小動物や植物、野菜などの世話を通して、飼育物にも命があることを気づき、思いやりやいたわりの気持ちを育み豊かな感性を育てる。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）
保幼小中 一貫教育 の推進 (保幼小 接続)	・「久美浜学園」のめざす子ども像をもとに、学園の基本方針を理解しながら取組を進める。 ・園所や小中学校の交流の機会をつくり相互理解を深めるとともに園内研修で学びを共有し、保育実践に活かす。 ・就学の際の円滑な接続、必要な支援の継続をめざす。	・久美浜学園経営会議を通して子ども達の実態から課題点を知り、共通の目的をもつ。 ・小学校との連携（スタートカリキュラムやアプローチプログラム）を見直し、スムーズな接続に繋げる。 ・園児と児童、生徒との交流が深まるような学校行事（運動会、学習発表会、マラソン大会など）に参加し、豊かな心の育成につなげる。 ・学園内の園所や小、中学校と合同研修の場に参加し、互いに教育の理解を深め、効果的な指導方法や指導の連続性、一貫性について研修する。	○経営会議や小、中学校の授業参観に参加することにより子どもの実態を把握し、支援や連携につなげることができた。 ○園生活の生活スタイルや教育、保育内容を知ってもらうことで、幼児期と児童期の教育を円滑に接続することができた。 ○小学校の行事に参加することによって発表会に向けての取組や意欲につなげることができた。また中学生との交流によってSDGsの意識を高めることができた。 △園の公開保育は学園内の幼児教育の理解につながっているが、研修会等は学校のように全職員が参加することができず、限られた職員のみ参加であるため、園内での職員へのしっかりとした周知の必要性を感じた。

教育課程	・楽しい園生活を繰り広げる。 ・異年齢とかかわる機会を大切にし、人とかかわる楽しさを経験させる。 ・園生活を通して子どもの主体性や協同性を育てる。 ・様々な人との出会いを大切にし、人と関わりを楽しめる子どもの育成に努める。	・朝マラソン、体操など友達と一緒に体を使った遊びを取り入れることで、体を目覚めさせ、リズムある生活が習慣となるようにする。 ・異年齢の活動を通していろいろな友達と関わり、葛藤体験を通して思いやりの心やあこがれの気持ちを持てるようにする。 ・失敗しても大丈夫と安心感を与えるような保育者の態度や肯定的な言葉がけのもと自己発揮できるようにする。 ・結果だけでなくそこにたどり着くまでの過程を認める。 ・集団でなければできないこと、大勢ですると楽しいことに気付かせ、他人に関心をもたせる。 ・身近な地域の環境に関わり、活動を展開する充実感を味わいながら楽しい経験を積み重ね、地域の良さを気づくようにする。	○朝マラソンや巧技台、鉄棒などを組み合わせたサーキットに継続して取り組むことで、友達と一緒に多様な動きを身に付けることができた。 ○異年齢の行動を真似てやってみたり、一緒に遊んだりする中で、我慢や悔しい気持ち、友達の役に立つ喜びなどの体験を重ね、活動を発展させることができるようになってきた。 ○様々な活動をする中で、自分の思いや考えを伝えようとする園児の姿がたくさん見られるようになった。職員が仲立ちをすることにより少しずつ互いを受け止め、認め合う姿も見られるようになってきた。 △近隣の果樹園などに度々熊が出没し、山遊びを通しての遊びを体験したり、散歩に出かけたりすることがなかなかできなかった。地域の良さが感じとれるように年間を通して園外保育等を計画し、地域に触れる機会を増やしていきたい。
子育て支援	・保護者の気持ちに寄り添い、安心して子育てができるように支援すると共に保護者が子どもの成長に気付き子育ての喜びを感じられるようにする。 ・未就園児親子の子育ての安定を図る。	・登降園時に職員が玄関で迎え入れたり見送ったりすることで、保護者がいつでも気軽に話や相談できるような雰囲気をつくるようにする。 ・園庭開放日や園開放日を通して、保護者同士が交流したり子どもの成長を見たりする場をつくり子育ての楽しさを共有できるようにする。 ・園児の様子をドキュメンテーションや動画配信等を活用した情報発信を工夫し、遊びが学びそのものである。ということを保護者に伝え共通理解を図り、信頼される園づくりに努める。	○登降園時、各クラスの職員と共に迎え入れたり送りだしたりし、何気ない話や相談に耳を傾け保護者との対話に心掛けることで信頼関係を築くことができた。 ○園庭開放日を設けることで園内のいろいろな年齢の親子が交流する場となった。また園開放日は、未就園児の親子が同年齢の子どもと遊んだり、子育ての不安が解消されたりする場となった。 ○各クラスの活動の様子を配信することで園での子ども達の様子を伝え、保護者と園の教育方針やねらい等を共有することができた。
特色ある園づくり	・地域の人や身近な自然環境を活用した教育、保育を取り入れ、目指す。 ・自然体験や SDGs について考え、日々の生活の中でも意識付けていく。	・地域の人との協力のもと泥田んぼ遊びや山遊びを通して、新たな疑問や発見から好奇心や探求心が芽生え、主体的に取り組むことから得られる達成感を味わうことができるようにする。 ・牛乳パックや空き缶の回収、ペットボトルキャップの収集また、微生物による堆肥づくりなどの取組からものや食べ物を大切にする態度を習慣化していく。	△泥田んぼや山遊びを始動しようとする熊騒動に遭遇し、自然環境を活用した教育保育を十分に行うことはできなかった。子どもの安全を第一に考えながら好奇心や探究心が育まれる環境を探っていきたい。 △回収物の収集は保護者にも浸透していて常習化しているが、微生物による堆肥づくりは子どもたちに浸透することができなかった。目に見えない微生物の存在を子ども達にわかりやすく伝えたり、堆肥を土に混ぜたらどうなるかなどの興味付けをしたりなど工夫が必要であった。
次年度に向けた改善の方向性	・久美浜学園での保幼小中のつながりの中で、幼児教育で身につけたことが学習の基礎や姿勢のもととなることを伝えるために公開保育を行い、研修を重ねる。 ・保育の環境や援助の仕方について、各年齢のねらっていることを共通理解ができるように職員間での話し合いを重ねる。 ・自分の興味や関心のあることに取り組んだり、友達とコミュニケーションをとりながら、探究的な学び（実体験）ができるような保育を工夫したりしていく。 ・地域の方との交流で、自然に触れたり地域の良さに気づいたり、豊かな心と健康な体を育んだりしていきたい。		